

氏名	伶 艶
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5384 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)
学位論文題目	モンゴル語の存在動詞に関する形態・統語論的研究—日本語との対照—
学位論文審査委員	教授 栗林 裕 准教授 片桐 真澄 教授 宮崎 和人 准教授 中東 靖恵 大阪大学名誉教授 角道 正佳

学位論文内容の要旨

本論文は内蒙古のモンゴル語の存在動詞に関わる言語現象を広く取り扱っており、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、以下の全 9 章から構成される。

第一章 序論

第二章 先行研究と本研究の立場

第三章 存在動詞と存在文・所有文

第四章 出来事存在文

第五章 存在動詞の多義性

第六章 存在動詞の文法化した形式・用法

第七章 存在・コピュラ動詞におけるテンス形式のムード用法

第八章 事態発見におけるテンス・アスペクト形式の使用条件

第九章 結論

略号一覧、参考文献、例文採集資料

本論文では、モンゴル語の存在動詞に関して、存在動詞述語文、存在動詞の文法化した形式・用法、存在・コピュラ動詞におけるテンス形式のムード用法、存在動詞から文法化したアスペクト形式の使用条件というような形態・統語論的な観点から日本語と対照しながら検討した。存在動詞述語文

では、存在動詞の存在文と所有文、出来事名詞存在文、存在文（名詞句＋存在動詞）の多義性という様々な観点から考察した。存在動詞の文法化した形式・用法では、存在動詞の内容語から機能語へと文法化した形式・用法をまとめ、その全体像を探った。そして、存在・コピュラ動詞のテンス形式に見られるムード用法及び、テンス・アスペクト形式の使用条件について考察した。その結果、以下のことを明らかにした。

1. 存在動詞述語文

1) 存在動詞の存在文と所有文

モンゴル語では、存在動詞存在文の \emptyset 格名詞句には「私の」「あらゆる」「どの」などの定性の制限と有性性の制限が課されないのに対して、存在動詞の所有文の \emptyset 格名詞句には制限が課されていることがわかった。日本語と同様に、存在動詞文の存在の意味と所有の意味とでは、文中に現れる名詞句の関係が異なることを示した。

2) 出来事名詞存在文

日本語では、「事故」のような出来事名詞の「発生」を存在動詞で表現できるが、モンゴル語では、存在動詞の状態的概念と「事故」のような出来事名詞の突発的事態が整合しないため表現できない。このように、モンゴル語の存在動詞は事象叙述のリアルな動的動詞の意味は表現できないが、属性叙述の〈反復習慣〉とポテンシャルなく予定〉は表現できることを示した。これに対して日本語の出来事名詞存在文の存在動詞は、リアルとポテンシャルの両方を表現できる。

3) 存在文（名詞句＋存在動詞）の多義性

「名詞句＋存在動詞」の存在文では、日本語とモンゴル語の存在動詞は、状態的概念の性質から、〈状態描写〉〈所有叙述〉〈関係叙述〉〈思考表出〉〈情意表出〉〈願望表出〉〈意志表出〉といった文機能を表すことができる。また、日本語の存在動詞「ある」は〈感覚表出〉〈事象描写〉〈属性叙述〉の文機能まで表せるのに対して、モンゴル語の存在動詞は表せない。その理由として、日本語では名詞的表現を好む傾向があり、モンゴル語は動詞的表現を好む傾向があるため、それが存在「文」の多義性に影響を及ぼしていると考えられる。

2. 存在動詞の文法化した形式・用法

現代モンゴル語における存在動詞から文法化した形式・用法の全体像を探ることにより、従来の研究で指摘されている補助動詞とコピュラ動詞の他に形式動詞としても使用されている現象が見られた。コピュラ動詞の用法は、名詞・形容詞のテンス、一時性の明示、丁寧表現に下位分類することができると考えられる。そしてこのようなコピュラ動詞から文法機能を補助するため、さらに形式動詞として接尾辞や副動詞と複合し、推量の他に逆接の用法まで文法化が進んでいると考えられる。

3. 存在・コピュラ動詞におけるテンス形式のムード用法

思いかけずに発見された事実の場合は、基本的に非過去形 *bayi-na* が用いられ、その事実から

過去と関連（事前想定・既存知識）があり、そして話者に認識の変化が起こった場合には過去形 *bayi-jai* が用いられる。過去形 *bayi-jai* は話者に認識の変化が起こった場合の「眼前事態における発見」「思い出し」「話者自身の知識の修正」に用いられる。さらに、1) 探索意識を活性化されている場合、2) 該当の事態に関する既存知識と新規知識の間に認識の変化が起こっていない場合、及び、3) 聞き手の知識を修正する場合には、日本語では「タ」形が使用されるが、モンゴル語では存在・コピュラ動詞の非過去形が使用されるという両言語間の相違も明確に示した。

4. テンス・アスペクト形式の使用条件

「ある変化の結果状態を見た時」の言語化について、モンゴル語では、話者の常識世界において「あり得ない」もしくは「あってはならない」という「意外な情報」を言語化する場合は *-jai* が使用される。一方、話者の常識世界において「あり得る」もしくは「あってもよい」という「一般的な情報」を言語化する場合は、*-γad bayi-na* が使用される。これに対して、日本語では、「意外な情報」や「一般的な情報」に関わらず、基本的に眼の前の状況の情報を「テイル」で言語化するように、両言語間のテンス・アスペクト形式の使用に相違が見られることを指摘した。

学位論文審査結果の要旨

伶艶氏が提出した学位請求論文「モンゴル語の存在動詞に関する形態・統語論的研究—日本語との対照—」に関する学位論文審査会は、2016年2月4日（木）16時より18時15分まで一号館5階524言語系セミナー室で行われた。学位論文審査委員会は、栗林裕（主査：言語学）、片桐真澄（言語学）、宮崎和人（日本語学）、中東靖恵（社会言語学）の各教員および学外から角道正佳（モンゴル語学、言語学）大阪大学名誉教授を招聘し、合計5名で構成された。

初めに伶艶氏自身が論文全体の要旨を述べた後、予備論文で指摘された問題点に対してどのように対応したのかについての説明があった。その後、モンゴル語の専門家である角道名誉教授より論文の具体的な記述に関わる質問やコメントが出され、引き続き、個々の審査委員から質問およびコメントが出された。

本論文は内蒙古のモンゴル語の存在動詞に関わる言語現象を広く取り扱っており、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、全9章から構成される（総頁数 A4版172頁）。本論文の研究成果は以下のように、外部からの客観的な審査を経ている：発表前審査有の学会発表（1本）、査読付き学会誌（3本）、学内の学術誌（1本）。

本論文では、モンゴル語の存在動詞に関して、存在動詞述語文、存在動詞の文法化した形式・用法、存在動詞のテンス形式とテンス・アスペクト形式の使用条件という形態・統語論的な観点から、日本語と対照しながら検討し、次のような研究目的を掲げて論を進めている。

(1) 存在動詞述語文の究明

- (2) 存在動詞の文法化した形式・用法の究明
- (3) 存在・コピュラ動詞のテンスのムード用法の究明
- (4) テンス・アスペクト形式における使用条件の究明
- (5) 日本語とモンゴル語の対照

研究方法としては、母語話者による文法的判断の作例資料調査や小説や電子コーパス資料などの言語資料を分析することにより、主に次のような形態・統語的特徴や意味・語用論的特徴を明らかにした。

- 1) 存在動詞 **bayi-** を用いた所有文の \emptyset 格名詞句には定性の制限が課されている。
- 2) モンゴル語の出来事存在文の存在動詞はポテンシャルな表現に用いられ、リアルな動的動詞の意味を表現できない。
- 3) 「名詞句+存在動詞」の存在文では、日本語の存在動詞「ある」は〈感覚表出〉、〈事象描写〉、〈属性叙述〉の文機能まで表せるのに対して、モンゴル語の存在動詞では表せない。その理由として、日本語では、名詞的表現を好む傾向があり、モンゴル語は動詞的表現を好む傾向があるため、それが存在文の多義性に影響を及ぼしている。
- 4) 存在動詞 **bayi-** はコピュラ動詞として、名詞・形容詞のテンス、一時性の明示、丁寧表現の助動詞として使用されている。そしてコピュラ動詞から、さらには形式動詞として接尾辞と複合し、推量や逆接の用法まで文法化が進んでいる。
- 5) 存在動詞の過去形の **bayi-jai** は話者に認識の変化が起こった場合の「眼前事態における発見」、「思い出し」、「話者自身の知識の修正」に用いられる。
- 6) 「意外な情報」を言語化する場合には **-jai** 形式が使用され、「一般的な情報」を言語化する場合には **-γad bayi-na** 形式が使用される。

本研究の特色はモンゴル語母語話者である侖艶氏が、歴史的研究や理論的研究を含む日本語学からの研究成果から得られた概念や研究方法に基づきながら、今までに指摘されていないモンゴル語と日本語の差異について分析を行い一定の成果を出したことで、それに関連するモンゴル語の言語資料の提示にある。本研究の方法論は、モンゴル語以外のアルタイ型諸言語の存在動詞にも応用できる可能性があり、将来的に言語類型論的な貢献も見込めるものである。

審査委員から出された意見としては主に次のようなものであった。形態・統語論的研究という論文タイトルであるが、統語論的な側面の論考が少ないこと、今までに気づかれることのなかった興味深い言語データの提示がなされていること、対照する際に日本語の分析の枠組みをそのままモンゴル語に適用する傾向が見られること、日本語教育への具体的な提案をするまでには至らなかったことなどが指摘された。

審査委員会は、侖艶氏の学位請求論文には若干の課題はあるものの、その研究成果の意義を認め、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると全員一致での結論とした。